

論点整理ペーパー及び農薬専門調査会体制

(平成 30 年 4 月農薬専門調査会決定)

頁

農薬専門調査会体制（平成 30 年 4 月農薬専門調査会決定） 1

【参考】

（部会で ADI 等が決定し幹事会へ報告する農薬）

ピメトロジン..... 2

農薬専門調査会体制(平成30年4月農薬専門調査会決定)



幹事会			
西川 秋佳	《座長》		
納屋 聖人	《座長代理》		
赤池 昭紀		永田 清	
浅野 哲		長野 嘉介	
小野 敦	※	林 真	
※三枝 順三		本間 正充	
代田 眞理子		松本 清司	
清家 伸康		森田 健	
中島 美紀		與語 靖洋	

※: 専門参考人

ピメトロジン（第2版）

諮問理由	化学構造	作用機序	用途	追加資料
・残留基準値の変更	ピリジンアゾメチン系	昆虫に摂食抑止作用を示し、餓死を引き起こす。	殺虫剤	<ul style="list-style-type: none"> ・急性毒性試験（ラット） ・28日間亜急性毒性試験（ラット） ・発達神経毒性試験（ラット） ・遺伝毒性試験

【試験成績の概要】

1. 動物体内運命試験の結果、ピメトロジンは速やかに吸収、排泄され、体内では肝臓、腎臓への分布が多く認められた。主要代謝物はD、E、F及びMであった。主に尿中に排泄された。
2. 畜産動物（ヤギ及びニワトリ）を用いた体内運命試験の結果、可食部における主要代謝物としてCが認められたほか、ヤギではE（抱合体を含む）、ニワトリではIA6が認められた。
3. 植物体内運命試験の結果、散布したピメトロジンは植物体内に浸透、移行することが示唆された。主要代謝物としてJ、K、M（配糖体を含む）及びN（配糖体を含む）が10%TRRを超えて認められた。
4. 各種毒性試験結果から、ピメトロジン投与による影響は、主に肝臓、甲状腺及び血液に認められた。繁殖能に対する影響及び遺伝毒性は認められなかった。
5. 発生毒性試験において、骨格変異の増加が認められたが、いずれも奇形に分類される所見ではないことから、ピメトロジンには催奇形性はないと考えられた。
6. ラットを用いた発達神経毒性試験において、発達神経毒性は認められなかったが、分娩時に母毒性が認められ、出生児の死亡率が増加した。
7. 発がん性試験において、雌ラット及び雌雄マウスで肝腫瘍の発生増加が認められた。発がんメカニズム試験が実施され、肝中期発がん性試験ではプロモーション作用が示されなかったものの、本試験条件下では結論を得るには至らなかった。酵素誘導は認められたが、発がんメカニズムを解明するには至らなかった。また、甲状腺中期発がん性試験の結果、甲状腺に対して弱い発がん促進作用を有すると考えられた。ただし、遺伝毒性試験では全て陰性であり、発がんメカニズムに遺伝毒性が関与しているとは考え難く、評価に当たり閾値を設定することは可能であると考えられた。